

# 「農学系」教育評価報告書

(平成14年度着手 分野別教育評価)

静岡大学農学部

平成16年3月

大学評価・学位授与機構



## 大学評価・学位授与機構が行う大学評価

### 大学評価・学位授与機構が行う大学評価について

#### 1 評価の目的

大学評価・学位授与機構(以下「機構」)が行う評価は、大学及び大学共同利用機関(以下「大学等」)が競争的環境の中で個性が輝く機関として一層発展するよう、大学等の教育研究活動等の状況や成果を多面的に評価することにより、その結果を、大学等にフィードバックし、教育研究活動等の改善に役立てるとともに、社会に公表することにより、公共的機関としての大学等の教育研究活動等について、広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくことを目的としている。

#### 2 評価の区分

機構が行う評価は、今回報告する平成14年度着手分までを試行的実施期間としており、今回は以下の3区分で評価を実施した。

- (1) 全学テーマ別評価(国際的な連携及び交流活動)
- (2) 分野別教育評価(人文学系、経済学系、農学系、総合科学)
- (3) 分野別研究評価(人文学系、経済学系、農学系、総合科学)

#### 3 目的及び目標に即した評価

機構が行う評価は、大学等の個性や特色が十二分に発揮できるよう、教育研究活動等に関して大学等が有する目的及び目標に即して行うことを基本原則としている。そのため、目的及び目標が、大学等の設置の趣旨、歴史や伝統、規模や資源などの人的・物的条件、地理的条件、将来計画などを考慮して、明確かつ具体的に整理されていることを前提とした。

### 分野別教育評価「農学系」について

#### 1 評価の対象組織及び内容

今回の評価は、設置者から要請があった大学の学部及び研究科(以下「対象組織」)を対象とし、学部、研究科のそれぞれを単位として実施した。

評価は、対象組織の現在の教育活動等の状況について、原則として過去5年間の状況の分析を通じて、次の6項目の項目別評価により実施した。

- (1) 教育の実施体制
- (2) 教育内容面での取組
- (3) 教育方法及び成績評価面での取組
- (4) 教育の達成状況
- (5) 学習に対する支援
- (6) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

#### 2 評価のプロセス

- (1) 対象組織においては、機構の示す要項に基づき自己評価を行い、自己評価書(根拠となる資料・データを含む。)を平成15年7月末に機構へ提出した。
- (2) 機構においては、専門委員会の下に評価チームを編成し、自己評価書の書面調査及び対象組織への訪問調査を実施した。  
なお、評価チームは、各対象組織により、教育目的及び目標に沿って評価項目の要素ごとに独自に設定された観点に基づき分析を行い、その分析結果を踏まえ、要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献(達成又は機能)の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で評価項目全体の水準を導き出した。
- (3) 機構は、これらの調査結果を踏まえ、その結果を専門委員会で取りまとめた上、大学評価委員会で評価結果を決定した。
- (4) 機構は、評価結果に対する意見の申立ての機会を設け、申立てがあった対象組織について、平成16年3月の大学評価委員会において最終的な評価結果を確定した。

#### 3 本報告書の内容

「対象組織の現況及び特徴」、「教育目的及び目標」及び「特記事項」欄は、対象組織から提出された自己評価書から転載している。

「評価項目ごとの評価結果」は評価項目ごとに、貢献(達成及び機能)の状況を要素ごとに記述している。

また、当該評価項目の水準を、これらの状況から総合的に判断し、以下の5種類の「水準を分かりやすく示す記述」を用いて示している。

- ・十分に貢献(達成又は機能)している。
- ・おおむね貢献(達成又は機能)している。
- ・相応に貢献(達成又は機能)している。
- ・ある程度貢献(達成又は機能)している。
- ・ほとんど貢献(達成又は機能)していない。

なお、これらの水準は、対象組織の設定した教育目的及び目標に対するものであり、相対比較することは意味を持たない。

また、評価項目全体から見て特に重要な点を、「特に優れた点及び改善点等」として記述している。

「評価結果の概要」は、評価結果を要約して示している。

「意見の申立て及びその対応」は、評価結果に対する意見の申立てがあった対象組織について、その内容を転載するとともに、それへの機構の対応を示している。

#### 4 本報告書の公表

本報告書は、対象組織及びその設置者に提供するとともに、広く社会に公表している。

## 対象組織の現況及び特徴

対象組織から提出された自己評価書から転載

### 1. 現況

- (1) 機関名 静岡大学
- (2) 学部名 農学部
- (3) 所在地 静岡県静岡市大谷 836
- (4) 学科構成  
 人間環境科学科  
 生物生産科学科  
 森林資源科学科  
 応用生物化学科
- (5) 学生数及び教員数  
 学生数  
 688 名  
 教員数  
 74 名

及び応用の科学であり、人類の普遍的課題である食糧の確保、増産技術の発展に大きな貢献をしてきた。近年は、第一次産業の発展に寄与するばかりではなく、地球規模における環境と資源の保全問題の解決を目指し、持続可能な生物生産技術や新しい生物機能利用技術の開発等、生命科学を含めた総合科学として社会的使命を高めつつ、その発展が期待されている。

このような社会的趨勢の中で農学部は、生物生産科学、生命科学、生物資源科学、環境科学に関する基礎的な教育研究の重視、応用力をもった個性豊かで創造性に富む人材の育成と静岡県を中心とした東海地域の恵まれた環境と地場産業との関連性を重視し、地域の貢献に努める等々の目的を達成するため教育・研究に当たっている。

さらに、学部・大学院の教育研究の支援組織として、また地域社会に対して大きな役割を果たしている附属施設（農場、演習林他 2 施設）を平成 14 年に発展的に改組し、地域的条件など静岡県の特色を生かしたフィールド科学を教育研究の共通のテーマとして位置付けた「地域フィールド科学教育研究センター」として統合した。このセンターは、学部学生や修士学生の教育の場として活用することにより、広い視野から農林水産業を捉えて行動できる人材を育成するとともに、地域との連携を強め学習・研究の拠点として広く開放し、自然環境の改善や地域社会の発展に貢献することを目的としている。

### 2. 特徴

本学農学部は、昭和 26 年に前身の静岡県立農科大学が国立移管されて、静岡県磐田市に農学科と林学科の 2 学科をもって発足した。昭和 28 年に農芸化学科、同 41 年に林産学科、引き続いて同 42 年に園芸学科が設置され、同 48 年に将来の発展を考慮し、現在の静岡市大谷に移転した。

その後、平成元年にはバイオテクノロジーの進展、資源と環境の保全の高まりを受け、学問領域を再編成することとなり、それまでの 5 学科から、生物生産科学科、森林資源科学科、応用生物化学科の 3 学科大講座制に組織を再編した。

また、平成 8 年には、多様な環境問題に的確に対応しうる人材を育成する目的で人間環境科学科が設置された。

「農学」は、生物資源の生産と利用開発に関する基礎

## 教育目的及び目標

対象組織から提出された自己評価書から転載

### 1. 教育目的

- (1) 本学部は、自然や農業に興味をもち、理系のみならず文系科目に関する幅広い基礎学力を有し、次のような意欲と熱意溢れる学生を受け入れる。  
 人類の生存に直接関わる生物資源と環境に強い関心を持ち、その解決に貢献しようという意欲のある学生。  
 自然科学に興味があり、人間と自然とのよりよい関係を求める、熱意溢れる学生。
- (2) 本学部は、生物資源の生産と利用および環境に関する教育を重視し、農学のもつ幅広い知識を習得させ、自主性・応用能力を備えた人材を養成する。
- (3) 本学部は、学生支援としての相談体制を整え、学習環境の充実と就職支援体制の強化を図る。

### 2. 教育目標

#### 教育の実施体制

- (1) 学部の理念にそって、社会的要請に応じた教育システムの見直しと再構築を行う。 [目的(1)]
- (2) アドミッションポリシーを広く社会に公開し、多様な入学者選抜方法を導入する。 [目的(1)]
- #### 教育内容面での取組
- (3) 授業科目の履修にあたっては、学生の多様なニーズに配慮した取組を行う。 [目的(2)]
- (4) 社会の国際化やIT化に対応した外国語能力と情報処理能力を習得できるようカリキュラムを整備する。 [目的(2)]
- (5) 自然観察能力と課題探究能力を養うため、低学年次におけるフィールド科学に関するカリキュラム(講義、演習)を充実させる。 [目的(2)]
- (6) インターンシップ制度を導入して、職業意識の向上を図る。 [目的(2)]
- (7) ファカルティ・ディベロップメント活動を強化する。 [目的(2)]

#### 教育方法及び成績評価面での取組

- (8) 共通科目と専門科目の有機的な連携を強化し、低学年における実験実習科目の充実を図る。 [目的(2)]
- (9) ティーチングアシスタント(TA)を活用し、きめ細かい教育指導を行う。 [目的(3)]
- (10) 厳格な成績評価を実施する。 [目的(3)]
- (11) 学生による授業アンケート実施し、授業方法の改善を図る。 [目的(3)]
- (12) 施設・設備の利活用を進める。 [目的(3)]
- #### 教育の達成状況
- (13) 教育の達成状況を逐次把握し卒業生・在学生による授業評価を学習指導に役立てる。 [目的(2)]
- (14) 企業等による評価を教育改善に役立て、一般社会や産業界に貢献できる人材を輩出するよう努める。 [目的(3)]

#### 学習に対する支援

- (15) 多様な履修歴を有する学生に対応できるようガイダンスを充実し、共通教育から専門教育への滑らかな移行を図る。 [目的(3)]
- (16) クラス担任制及び学生相談室を活用し、学習を支援する。 [目的(3)]
- (17) 学習空間や教育施設の改善をはかり、学習を支援する。 [目的(3)]
- #### 教育の質の向上及び改善のためのシステム
- (18) 自己評価委員会による評価活動を活発化させ、恒常的に教育活動を評価する体制を整える。 [目的(2)]

## 評価項目ごとの評価結果

### 1. 教育の実施体制

この項目では、対象組織における「教育の実施体制」について、「教育実施組織の整備に関する取組状況」、「教育目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組状況」及び「学生受入方針（アドミッション・ポリシー）に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し、水準を導き出したものを示している。また、特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

#### 目的及び目標の実現への貢献度の状況

##### 【要素1】教育実施組織の整備に関する取組状況

学科の構成について、平成8年度に社会的要請に応える人材を養成するという教育目的及び目標を達成するため、従来の一次産業技術の向上から生物資源科学、生命科学、環境科学の基礎的分野を重視して持続可能な生物資源の生産と利用に関する教育研究に重点を移した4学科構成とした取組、平成14年度に教育研究支援組織として附属施設（農場、演習林、乾燥地農業実験実習施設、魚類餌料実験実習施設）を地域フィールド科学教育研究センターとして統合した取組は、優れている。

教員組織の構成について、年齢構成が高齢化していること、女子学生の割合が多い学部であるにもかかわらず、女性教員が1名もいないことなどは、改善の余地がある。教員の採用について、教育評価等に配慮した資格審査が実施されている点は、相応である。

##### 【要素2】教育目的及び目標の趣旨の周知及び公表に関する取組状況

教職員に対する教育目的及び目標の趣旨の周知は、外部評価資料として取りまとめられた「静岡大学農学部の現状と将来」、自己評価報告書である「静岡大学の現状と課題」などの配布資料により行われ、また学生に対しては、年度始めに配布される「学生便覧」、入学時や学期始めに実施される「ガイダンス」などにより行われており、相応である。

学外者に対する教育目的及び目標の公表について、オープンキャンパスや学部説明会、ホームページ等で行われていることは、相応である。また高等学校への訪問の機会や高等学校派遣模擬授業時にも公表を行っていることは特色ある取組であり、全体として優れている。

##### 【要素3】学生受入方針（アドミッション・ポリシー）に関する取組状況

学生受入方針の明確な策定について、学部としての入学受入方針が農学部入試委員会で策定されたこと、学生受入方針の学内外への周知・公表については、学部説明会やオープンキャンパスなどを通じて公表されており、また学生募集要項に記載されているなど相応であるが、学科単位で明記されていない点は、学生選抜を学科単位で実施していることから、改善の余地がある。

アドミッション・ポリシーに沿った学生受入方策について、一般入試や特別選抜（推薦、帰国子女及び私費外国人留学生）、3年次編入学試験等、多様な入学試験を実施していることは、教育目標に対する取組として、相応である。

この項目の水準は、「教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。」である。

#### 特に優れた点及び改善点等

高等学校への訪問の機会や高等学校派遣模擬授業時にも教育目的及び目標の公表を行っていることは特色ある取組であり、優れている。

学生募集要項に学科単位で学生受入方針が明記されていない点は、学生選抜を学科単位で実施していることから、改善の余地がある。

## 2. 教育内容面での取組

この項目では、対象組織における「教育内容面での取組」について、「教育課程の編成に関する取組状況」及び「授業の内容に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し、水準を導き出したものを示している。また、特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### 目的及び目標の実現への貢献度の状況

#### 【要素1】教育課程の編成に関する取組状況

教育課程の体系的な編成については、平成12年度より基礎から応用までの4年一貫・くさび型教育課程に編成されている。特に専門科目を学ぶための専門科目（基礎）を学部共通の必修とし、物理、化学、生物、数学の各概論並びに物理、化学、生物の各実験を全員に課している点は基礎学力の強化を図る点で優れており、教育課程は体系的に編成されている。

平成11年にまとめられた「教官側から見た教育の実態と学生アンケートによる学生生活の評価」結果への対応として、高等学校で物理を履修しなかった学生及び学部で物理学の授業への対応が困難な学生を対象とする「理数基礎演習」を補講授業として開講している点、化学と生物学については「基礎クラス」と「アドバンストクラス」を設けて進度別に授業を行っている点、フィールド科学関連科目を1年次から開講している点、応用生物化学科において実務体験を通し職業意識を高める目的でインターンシップ（学生が在学中に企業等において自らの専攻や将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと）制度を導入している点など、きめ細かな教育課程編成上の配慮がなされており、優れている。

#### 【要素2】授業の内容に関する取組状況

学生からのアンケート結果から講義に対する学生の興味、理解度と満足度は比較的高く、教育課程の編成の趣旨に沿った授業内容とするための取組については成果を上げており、講義内容の重複の回避、相互の関連付けや有機的な連携を図るために個々の教員が改善に努めている点は相応であるが、学部としての積極的な取組には

至っておらず、改善の余地がある。

平成10年度教育評価・FD調査研究プロジェクトを立ち上げ、教育内容等の研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント、以下「FD」という。）への取組について報告書を作成し、全学組織として静岡大学教育研究開発委員会を設置している。農学部としては、学部FD委員会が組織され、全学で実施しているFD合宿研修へ積極的に参加している点や授業評価アンケートを実施している点など、相応である。

シラバス（各授業科目の詳細な授業計画）の内容と活用方法について、内容に関しては全体的に統一されていない点で改善の余地があるものの、記述項目を統一した共通フォーマットで作成されている点及び学生のアンケート結果から毎年配布されているシラバスが履修科目の選択に役立てられている点は、相応である。

この項目の水準は、「教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。」である。

### 特に優れた点及び改善点等

「教官側から見た教育の実態と学生アンケートによる学生生活の評価」結果への対応として、高等学校で物理を履修しなかった学生及び学部で物理学の授業への対応が困難な学生を対象とする「理数基礎演習」（補講授業）の開講、また化学と生物学については進度別に授業を行う「基礎クラス」と「アドバンストクラス」の設置、フィールド科学関連科目の1年次からの開講、応用生物化学科におけるインターンシップ制度の導入など、きめ細かな教育課程編成上の配慮がなされている点等は、優れている。

シラバスの内容と活用方法について、記述項目を統一した共通フォーマットで作成されているが、内容に関して全体的に統一されていない点は、改善の余地がある。

### 3. 教育方法及び成績評価面での取組

この項目では、対象組織における「教育方法及び成績評価面での取組」について、「授業形態、学習指導法等の教育方法に関する取組状況」、「成績評価法に関する取組状況」及び「施設・設備の整備・活用に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し、水準を導き出したものを示している。また、特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

#### 目的及び目標の実現への貢献度の状況

##### 【要素1】授業形態、学習指導法等の教育方法に関する取組状況

教育課程を展開するための教育方法等として、教員側から見た教育の実態及び自主学習について、アンケート調査結果により現状を把握し授業の改善に利用した取組は、優れている。講義及び実験・実習・演習のバランスがとれている点、授業実施方法に関しては視聴覚装置を取り入れると共に、ティーチング・アシスタント（学部教育補助業務を行う大学院学生）を導入することにより実験・実習内容を深く理解させる取組を行っている点等は、相応である。

教育課程を展開するための教育指導、教育方法の工夫等について、多様な修学歴を持った入学者に対するガイダンスの実施や学生相談員・クラス担任の配置など、きめ細かい履修指導がなされている点、また教材・講義方法等の検討・工夫について視聴覚機器を駆使し理解度を向上させるよう努力している点は相応であるが、オフィスアワー（授業内容等に関する学生の質問等に応じるための時間として教員があらかじめ示す特定の時間帯）を設定していない点は改善の余地がある。

##### 【要素2】成績評価法に関する取組状況

成績評価基準が明確に設定されていない点は、問題がある。

実際の成績評価は教員の裁量に任されており、学部として統一されておらず、厳格な成績評価を実施するという教育目標に対する取組としては、問題がある。

##### 【要素3】施設・設備の整備・活用に関する取組状況

書棚、戸棚、分析機器などを固定化するなど、東海地震への対策がなされている点、諸設備に関して学部内に委員会を設置して運営方針が設定されている点は、相応である。

農学部図書室について、利便性の面で改善の余地があるものの、附属図書館とは別に学部図書室を設けている点は、相応である。

この項目の水準は、「教育目的及び目標の達成にある程度貢献している。」である。

#### 特に優れた点及び改善点等

教員側から見た教育の実態及び自主学習について、アンケート調査結果により現状を把握し授業の改善に利用した取組は、優れている。

成績評価基準が明確に設定されていない点は、問題がある。

実際の成績評価は教員の裁量に任されており、学部として統一されておらず、厳格な成績評価を実施するという教育目標に対する取組としては、問題がある。

## 4. 教育の達成状況

この項目では、対象組織における「教育の達成状況」について、「学生が身に付けた学力や育成された資質・能力の状況から判断した達成状況」及び「進学や就職などの卒業後の進路の状況から判断した達成状況」の要素ごとに教育目的及び目標に照らした達成の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で項目全体の達成の程度を評価し、水準を導き出したものを示している。また、特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### 目的及び目標に照らした達成度の状況

#### 【要素1】学生が身に付けた学力や育成された資質・能力の状況から判断した達成状況

成績評価基準が各教員に任されている現状では、単位取得率が学習成果の高さに結び付かない場合があるが、単位取得の実績は低くない。また退学・除籍者は過去5年間で1.1～1.6%、休学者は7.4%(海外留学生を含む)、留年者が10～18%、教員免許の取得者は15～30%である。上述のデータのいずれも決定的な判断資料とはならず、よりきめ細かな分析が必要であるが、留年者や退学・除籍者の割合などから、相応である。

在学生及び卒業生の授業評価等についてのアンケート調査の結果によれば、学生はおおむね満足している。一方、一部の授業での受講者数の制限への不満、それぞれの学科の理念・目的の違いによって意見の相反する評価結果が表れているものの、全体として相応である。

#### 【要素2】進学や就職などの卒業後の進路の状況から判断した達成状況

最近5ヶ年における卒業生の進路は、約40～50%が進学、約40～50%が就職である。不況下における厳しい就職状況を踏まえて進学や就職などの卒業後の進路の状況を見ると、地元企業・産業への貢献度が高く、相応である。

雇用主へのアンケート結果によると企業が静岡大学農学部学生を積極的に採用することを希望している点などから、大学卒業生として適切な素養を取得していると判断でき、達成状況は優れている。

この項目の水準は、「教育目的及び目標において意図する教育の成果がおおむね達成されている。」である。

### 特に優れた点及び改善点等

雇用主へのアンケート結果によると企業が静岡大学農学部学生を積極的に採用することを希望している点などから、大学卒業生として適切な素養を取得していると判断でき、達成状況は優れている。

---

## 5. 学習に対する支援

---

この項目では、対象組織における「学習に対する支援」について、「学習に対する支援体制の整備・活用に関する取組状況」及び「自主的学習環境（施設・設備）の整備・活用に関する取組状況」の要素ごとに教育目的及び目標の実現に向けた貢献の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で項目全体の貢献の程度を評価し、水準を導き出したものを示している。また、特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### 目的及び目標の実現への貢献度の状況

#### 【要素1】学習に対する支援体制の整備・活用に関する取組状況

授業や専門科目の選択の際のガイダンスについて教務委員会が中心となり、クラス担任がガイダンスに責任を持ち、学年別にきめ細かいガイダンスを実施している点、欠席者に対してもクラス担任を通して個別に必要書類を配布するなどの体制が整備されている点、新入生に電子メールアドレスを割り当てクラス担任への間接的な問いかけを可能としている取組などは、相応である。

学習を進める上でクラス担任制度、学生相談室及びセクシュアル・ハラスメント相談窓口など、相談助言体制が整えられており、これらの取組は相応である。

#### 【要素2】自主的学習環境（施設・設備）の整備・活用に関する取組状況

学生が自主的に学習できる環境の整備・活用について、学部共通の就職情報室が設置されている点、学科共通の実験準備室の情報機器を自由に使用できる点、附属図書館の開館時間について学生への利便性が配慮されている点及び学部図書室が設けられている点などは、相応である。

この項目の水準は、「教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。」である。

### 特に優れた点及び改善点等

自主的学習環境の整備・活用に関して、独自に設けられている学部図書室の利便性を図る点について、改善の余地がある。

## 6. 教育の質の向上及び改善のためのシステム

この項目では、対象組織における「教育の質の向上及び改善のためのシステム」について、「組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価する体制」及び「評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムの整備及び機能状況」の要素ごとに改善システムの機能の程度を判断し、それらを総合的に判断した上で項目全体の機能の程度を評価し、水準を導き出したものを示している。また、特に重要な点を「特に優れた点及び改善点等」として示している。

### 改善システムの機能の状況

#### 【要素1】組織としての教育活動及び個々の教員の教育活動を評価する体制

組織として教育の実施状況や問題点を的確に把握し教育活動を評価する体制について、農学部自己評価委員会が組織され、教育活動の評価に関するアンケート調査、自己評価、外部評価などの教育システムの見直しに向けた基礎的情報を得るために活動していることは、相応である。自己評価委員会は、報告書として「教官側から見た教育の実態と学生アンケートによる学生生活の評価」、  
「静岡大学の学部の現状と将来」、外部評価資料として「教育および研究活動・社会的貢献・大学運営 - 個人別一覧 -」を作成し、教員の教育活動の評価を行っている点は優れているが、定期的に評価し、その評価結果に対応する対処策を立て実行するまでに至っていない点は、改善の余地がある。

外部者による教育活動の評価について平成13年度に実施され、報告書として取りまとめ公表していることは相応であるが、指摘された問題点を個々の教員にフィードバックする体制が採られていない点は、改善の必要がある。

個々の教員の活動状況を評価する体制について、学生によるアンケート調査ばかりではなく教員個人の活動に関するデータも集積するなど進んだ取組も見られるが、教務委員会やカリキュラム委員会へのフィードバックが万全であるとはいえず、改善の必要がある。

#### 【要素2】評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムの整備及び機能状況

評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムとして平成14年度に学部FD委員会が設置され、全学のFD委員会と連携し検討を始めた点は、相応である。

評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付ける方策については、具体的な方策が講じられていないことから、改善の必要がある。

この項目の水準は、「向上及び改善のためのシステムがある程度機能している。」である。

### 特に優れた点及び改善点等

外部評価資料として「教育および研究活動・社会的貢献・大学運営 - 個人別一覧 -」を作成し、教員の教育活動の評価を行っている点は優れているが、定期的に評価し、その評価結果に対応する対処策を立て実行するまでに至っていない点は、改善の余地がある。

評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムとして平成14年度に学部FD委員会が設置され、全学のFD委員会と連携し検討を始めたが、具体的な方策が講じられていないことから、改善の必要がある。

## 評価結果の概要

### 1. 教育の実施体制

高等学校への訪問の機会や高等学校派遣模擬授業時にも教育目的及び目標の公表を行っていることは特色ある取組であり、優れている。

学生募集要項に学科単位で学生受入方針が明記されていない点は、学生選抜を学科単位で実施していることから、改善の余地がある。

この項目の水準は、「教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。」である。

### 2. 教育内容面での取組

「教官側から見た教育の実態と学生アンケートによる学生生活の評価」結果への対応として、高等学校で物理を履修しなかった学生及び学部で物理学の授業への対応が困難な学生を対象とする「理数基礎演習」(補講授業)の開講、また化学と生物学については進度別に授業を行う「基礎クラス」と「アドバンストクラス」の設置、フィールド科学関連科目の1年次からの開講、応用生物化学科におけるインターンシップ制度の導入など、きめ細かな教育課程編成上の配慮がなされている点等は、優れている。

シラパスの内容と活用方法について、記述項目を統一した共通フォーマットで作成されているが、内容に関して全体的に統一されていない点は、改善の余地がある。

この項目の水準は、「教育目的及び目標の達成におおむね貢献している。」である。

### 3. 教育方法及び成績評価面での取組

教員側から見た教育の実態及び自主学習について、アンケート調査結果により現状を把握し授業の改善に利用した取組は、優れている。

成績評価基準が明確に設定されていない点は、問題がある。

実際の成績評価は教員の裁量に任されており、学部として統一されておらず、厳格な成績評価を実施するという教育目標に対する取組としては、問題がある。

この項目の水準は、「教育目的及び目標の達成にある程度貢献している。」である。

### 4. 教育の達成状況

雇用主へのアンケート結果によると企業が静岡大学農学部学生を積極的に採用することを希望している点などから、大学卒業生として適切な素養を取得していると判断でき、達成状況は優れている。

この項目の水準は、「教育目的及び目標において意図する教育の成果がおおむね達成されている。」である。

### 5. 学習に対する支援

自主的学習環境の整備・活用に関して、独自に設けられている学部図書室の利便性を図る点について、改善の余地がある。

この項目の水準は、「教育目的及び目標の達成に相応に貢献している。」である。

### 6. 教育の質の向上及び改善のためのシステム

外部評価資料として「教育および研究活動・社会的貢献・大学運営 - 個人別一覧 -」を作成し、教員の教育活動の評価を行っている点は優れているが、定期的に評価し、その評価結果に対応する対処策を立て実行するまでに至っていない点は、改善の余地がある。

評価結果を教育の質の向上及び改善の取組に結び付けるシステムとして、平成14年度に学部FD委員会が設置され、全学のFD委員会と連携し検討を始めたが、具体的な方策が講じられていないことから、改善の必要がある。

この項目の水準は、「向上及び改善のためのシステムがある程度機能している。」である。

## 特記事項

対象組織から提出された自己評価書から転載

本学部では、一次産業技術の向上に重点をおいたこれまでの農学教育から、生物資源科学、生命科学、環境科学の基礎的分野を重視した教育を進めてきている。今後は、その教育理念・目的の達成にむけた十分な取り組みが必要で、一層の努力が必要であろう。このために、改善策の幾つかを以下に紹介する。

1. 生物資源科学、生命科学、環境科学の基礎としての専門科目（基礎）と付随する実験を重視し、導入段階にあるフィールド科学に関する講義や演習の内容充実を図る必要がある。
2. 本学部のアドミッション・ポリシーを明確にするとともに、これを入試制度や学生募集方法と密接に関連づける必要がある。また、様々な手段を用い積極的にアドミッション・ポリシーを公表する必要がある。
3. 効率的な教育体制を構築するため、授業間の内容的な重複を避け、基礎と専門との有機的な連携を図る必要があり、学部全体の組織的な体制整備が求められる。
4. 学部 FD 委員会の活動を活発化させるとともに評価結果を教育の質の向上及び改善に結び付けるシステムを整備する必要がある。
5. 導入したインターンシップ制度を活用し職業意識の向上を図ることや、同窓会および企業との連携を通じ、学生の就職活動を積極的に支援していく必要がある。
6. オフィスアワー制度を確立し、学生の相談やきめ細やかな助言等について制度的に実施することが望まれる。3年次の編入学生数が増している折からも、この制度による学部全体の支援体制の確立が求められる。